

最近における比較思想の発展

中村 元

本日は第十二回の大会で、年と共にますます学会が発展され誠におめでたいことでございます。もうすでに、会員は八百八十人あまりになられたということで、私共会員の一人として誠にうれしく思っております。その他、それに呼応していろいろの学会もできまして、さっきも理事室でぱったり伊東俊太郎さんにお会いしたのですが、伊東さんは比較文明学会というのを組織しております。この学会と多分に重なり合う面もあるかと思いますが、そちらのほうの方々もご参加いただけるようなことになりましたと、援軍を得たような力強さを感じるのでございます。

ただいまご紹介のお言葉にもありましたように、日本経済新聞から頼まれてくだらないことを書きました。そのわけは、私、ご承知の方もおられるかと思いますが、寺小屋をいたしております。あの新聞社がどういふわけか非常に興味をもちまして、よく

紹介を書いて送って下さいます。そのご厚意に対してつい断わりにくく、前々から依頼を受けておりまして、とうとう屈してしまったわけです。そのことを弟に申しましたところ、弟が申しますには、「うん、弱味につけこまれたって形だね。」正にそうでございますが、一つのいい機会だと思ひまして、比較思想に関して私は二回程書きました。この学会の成立から最近の発展までも書きましたので、もしご関心のおられる方は先月の二十八日ぐらいだったかと思いますが、ご参照下さい。

〔注——日本経済新聞「私の履歴書」昭和六十年五月一日～五月三十一日まで。比較思想（学会）のことは五月二十六日、五月二十七日所載〕

本日の部会でのご発表でも、比較思想研究の進路について大江精三先生から非常に広い視野にたつ深い反省のお言葉をいただきまして、頂門の一針として有難ういただいたのでありますが、そ

のお言葉の中にもありましたように、比較思想研究あるいは狭く言えば比較哲学研究について、これだけ大勢の方が集まられてこのように盛んであるということは、よその国には見られないことだとおっしゃいました。たしかにそうであると思います。少なくとも人数並びにその規模においてそう言えると思います。と同時に、またそれに賛成しない反対の気持を持っている学者の方々も決して少なくない。これは表へ現われないかもしれませんが、やはり、合わせて考慮すべき事実だと思います。いろいろ新しい動きが塞止められる中で、それを押破ってこまできたという、その意義は大きいと思います。個人的なことを申し上げるのをお許しただきたいと思いますが、先日、ちょっとある機会がありました、宮中で四分間でひと言私の研究の核心になることを言えといわれたのです。私は非常に困りました。前にも別の機会があったものですから、そこで私はこう申し上げました。今から百年前、一八八三年にマックス・ミュラーが般若心経のテクストを出しました。翻訳も出しました。そこでこういうことを言っているのです。これを英語に直してみただけで、ここに書いてあることは何のことやらさっぱりわからんと。我々にとって意味のないものだ。それはちょうどカントの『純粹理性批判』をサンスクリット語に翻訳してみても仏教のボーディサッタ(菩薩)たちには何のためにもならないであろうと、そういうことを言っているのです。それが百年前の受け取り方です。ところが今日になります

と、比較思想の学会というものの、会議というようなものがあちこちで開かれますし、さらに仏教とキリスト教の対比、対決という企てもあちこちでなされるようになりました。そのことをちょっと簡単に申し上げましたら、天皇陛下はこういうご質問をなさるのです。仏教とキリスト教のこの共通の面に両方の学者が理解を深めるようになったか、とおっしゃるのです。で私は共通の面が確かにありますから、そういうものも明らかにしようとすると同じ時に、違いもありますから、それも明確にしようとして、今学者は努力しますと、それだけお答えしておいたのです。時間もありませんでしたから。でそれで終ったのでありますが、ともかく、人類に本質的なものを取り出そうとする努力は世間におけるこの反対にもかかわらず、学問的にこままで動いてきて、こままで及んでいるということを、この機会に皆様に申し上げておこうと思います。

時間がありませんので、さて何を申し上げたいかと思っておりますが、人類の歴史のうちでいろいろな哲学思想の流れがあります。それに関する学問的研究というものは、ヨーロッパから起こったと言えらると思いますが、そのヨーロッパでは、従前には比較研究ということにあまり注意をしていなかったけれども、この頃は段々と企てが盛んになりまして、その一つといたしまして、スウェーデンの学術計画会議というのがございます。日本の学術会議とは違います。日本の学術会議というのは非常に行政的な政

治的なものですが、スウェーデンのは学問の研究をどう進めるかという計画をたてるどころだそうです。Forskningsrådet, Swedish Council for Planning and Coordination of Research (スウェーデン学術計画会議)という団体がストックホルムの郊

外のヘッセルビ(Hässelby Slätt)というお城で、一昨年ですが、世界諸国から四十六人の学者、知識人を招待しまして、自然・文化・技術の相互関係を論じたのであります。それぞれの分野については、学会もあり論議されていますけれども、それらの総合的な考察をするというのです。私が参りました時には、私の文章などもすでにスウェーデン語に直されておりまして、最近その報告をもらいましたが、私にあてがわれましたのは「自然」の問題です。Nature。これを東洋ではどう考えているか。自然の問題というのは、今、西洋でも大問題となっておりますから、そこで取り上げられたわけです。自然の問題ということになりますと、それよりも一、二年前にシカゴのエンサイクロペディア・ブリタニカのオフィスで「The Great Ideas Today」という論文集を毎年出しております。エンサイクロペディア・ブリタニカの付属刊行物みたいなものです。そこで「自然」という特集号を出しまして、いろいろな学者に論議させていますから、これも一つの総合研究であるということがいえると思います。これは比較研究というわけではありませんけれども、スウェーデンへ行って大面白かったのは、実物を見ることはできなかったのですが、スウェーデンの孤

島で仏像が見つかったのです。バイキングが持ってきたものに違いないのですが、スウェーデン人は、そんなもの知らん、と言っているのです。しかし、実際に書物になって刊行されておりますから、ちょっとご報告しておきます。

あと大きな企てはなかなかないようですが、部分的にはこういう研究をしている人はございまして、フランスでは、ソルボンヌの大学教授で、女性ですが、名前はツーム・ブルン(Zum Brunen)ドイツ語ですが、「井戸(泉)へ」ということですね。そういう姓の女性がおられます。おばあさんですが。その方は、エックハルトと東洋のミスティックとの対比研究をしまして、それから、エックハルトのテクストなども出版しています。その原稿を私も預っておりますが、従前はエックハルトならエックハルトだけを研究している。ところが、この頃は、東洋の似た思想と対比しようというところまできております。その方がこう言っております。エックハルトに関心を持つようになったのは内面的な理由になるのですが、その女史はスイスの出身でしてドイツ語区域なのです。そこで使われているドイツ語というのは、エックハルトの書いたりしたその文体に近いのだそうです。だからエックハルトが遠い彼方のものでなくして、自分に非常に親しみのあるもので、私のお祖父さんお祖母さんが話していたドイツ語にそっくりだ、とそういうようなことをその方は言っておられました。日本へも見えたことがあります。

ドイツでは、ご承知のように、戦前まででも、vergleichende Geschichte der Philosophie、比較哲学史というものが、私の知っている限りでも、少なくとも三冊出ております。ただ東洋に関しては、知識が不十分で弱いのは当然ですが、その視点から東洋研究にも近づき取り上げるといふふうであります。私は以前に、『日本宗教の近代性』という書物を書きました。それはドイツ語に翻訳されました。ボン大学のクリムカイトという宗教学の教授が取り上げて、人々にやらせたのですが、なぜ関心を持ったかというところ、私が取り上げたその仕方が、マックス・ウェーバーに対する反論になるから面白い、とそういうことを言っておりました。

なおこれも私の個人的ことですが、東西思想の平行的発展を論じました、『Parallel Developments—A Comparative History of Ideas』という書物は、来年二月にロンドンの Routledge and Kegan Paul で出ることになっております。先日、エディターに会いましたら、そのように報告をしてくれました。だから、部分的ですけれども関心はおこっている。ただ、この関心が、どこまで発展するかなお問題です。というのは、前世紀までは、第二次大戦以前までは、ドイツでレクラム文庫の中に東洋の古典がたくさん入っていました。ところがこの頃、ドイツでレクラム文庫にはインドの典籍など一冊もないというのです。だから、もちろん日本の書物など入れてくれません。ということは、民衆の間にそれだけ関心が薄くなった。学者は高い水準を保って研究を続けて

おりますが、社会的な支持がないと果してどれだけ続くか、若干疑問に思います。しかし、学会ではどうなるかわかりませんけれども、一般には、世界を一つのものとしてみるという動きは、やはり顕著なようでございます。

比較研究で大きな足跡を残し、今なお示しているのはアメリカだと思えます。さっきも大江先生のお話に出ましたが、あそこにはチャールズ・モリスという学者がいました。その人は私に個人的に言われたことがあります、自分の思想的な立場というものは一言でいえば、仏教であるといえようと言うのです。どうしてそういうえるかというのは、これも時間がありませんので省略しますけれど、モリスさんの書いた本は邦訳もありますからごらん下さい。モリスさんが、なぜ東洋思想に関心を持ったかというところ、若い時にタゴールがアメリカへ来て講演をした。それを自分は聞いたことがある。そこで深い感銘を受けたということを言っておりましたから、その時、実を結ばなくても、それが何年何十年たつてからまた影響を残すということが十分にありうるわけです。

アメリカにおける比較研究の、少なくとも思想面に関する比較研究の一つの大きな拠点は、ホノルルだと思います。ハワイ大学、それから東西センターとかそういうようなものがあるのをごいまして、あそこで『Philosophy—East and West』という雑誌をもう何十年にわたって刊行してきております。

アメリカ人で、今、世界哲学史を書いている人がおります。こ

これは John C. Platt という人ですが、“Global History of Philosophy” というものです。もうすでにたいへん厚い本が四冊出ています。全部完成すると何冊になるかわかりませんが、第四冊目はルネッサンスの前後までできております。年代的にずっと辿っているのです。世界中だれも注意してくれないものですから、私に第一巻に序文を書いてくれという依頼がありまして、第一巻には至らぬ英語で序文を書きました。第二巻はインドの R・C・パNDERIA 教授が書きました。いろいろな人が書けば、それだけで注意を引くわけです。この人の行き方は、年代的に、古い所からずっとトランスコンティネンタルにいろいろな文化圏にわたって同じ時代にどういう思想が現われ出て、どういう哲学者がいたかということを克明に辿っているのです。私が書いた本よりずっと詳しいものになるはずですよ。と申しますのは、私は原典研究の方から余技として足をのばしたという感じです。この方は、原典を読まないで翻訳だけで、これだけに一生打ち込んでいるのです。アメリカの大学図書館を利用しているから、あれだけのことが出来るのでしょうか。学歴はあまりはっきりした人ではないようです。前に会いました時に、私のような経歴のあやふやな人間は誰も構ってくれないよ、と言っていました。収入の道もあまりないらしい。今はマーシャル大学というところから引退しまして、ハワイの大学に Y M C A の宿舎があります。そこに一人暮らししておられる。足も不自由な方です。しかし、大学の書物をずっと利

用しながら、とにかくそこまでまとめた。私など手の及ばない南アメリカ、あるいは中米ですね、それからアフリカの哲学史やイスラム圏の哲学者、そういうのを全部取り入れております。これは打ち込んでいるから出来るし、それから、日本では文献がないでしょう。翻訳にしても、アメリカなら一か所になくても他にはあるというようなわけで、まとめたわけでしょう。Delhi の Morital Banarsidas から出ています。第四巻の書評を日本の学者に書いてもらいたい、どなたかに、と言ったもので、私は比較思想学会の本部へ交渉されたらいいでしょうと、そう言っておきました。しかし、手元に余分のコピーがないので、もし書いて下さる方があるのなら自分のコピーを上げてもらいたいとかそんなことを言っていました。打ち込んでいる学者の姿に打たれました。私は以前に、学生時代に伊藤吉之助先生から伺ったことがあるのですが、名前は忘れましたが、ある学者が西洋哲学史を書いたというお話です。その男はどこへも動めていない。古本屋の二階に泊っている、下が古本屋ですから、そこにある本を片っ端から読んで西洋哲学史を書いた、そう言われたことがあります。Platt 氏はそれに近い、とにかくほんとうに打ち込んでいる人です。

以前には、ハワイで東西哲学者会議が開かれまして、諸国の人を呼びました。チャールス・ムアという中心人物が亡くなってから途絶えておりました。ところが、昨年からまた活発になりました。昨年のお正月には、「仏教とキリスト教の対比」というシンポ

ジウムがございまして、いろいろな国々の学者が集まりました。特に向こうが呼びものにしたのはハンス・キュング(Hans Küng)というドイツ人の神学者です。この人はカトリックの大学教授ですけれども、ローマ法王から叱られて、講義をしてはならん、お勤めもしてはならんと、すっかり何というか「縛られた人」なのです。ですから、アメリカでは有名でして、ハンス・キュングについての本もいろいろ出ております。この人を呼べば聴衆はきっと集まるだろうと思つてやつたらしいのです。

それから続いて、夏にはアジア哲学比較学会というのがアメリカにありまして、これはアメリカの全国学会です。今までアメリカ本土でだけやっていた。これからはインターナショナルのものにしよう、その第一歩としてホノルルで開くことになりました。それで私に来てくれといわれるのです。どうしようかと思ひました。お正月に行ったのにまた同じハワイに行くのは思つたのですが、しかし、折角そう言ってきたから、これを有意義ならしめるにはと思つて、考えて条件を持ち出したのです。「日本の比較思想学会と共同主催なら承知する」と。そうしたら、よろしいといってきたのです。今度はこっちが困つてしまいました。共同主催というからにはこちらから相当大勢の人が行かなくてはならない。そこで考えまして、「日本語の部会を作れ」と言つたのです。日本語だけ話す部会です。そうしたら向こうがまたOKと言つてきたのです。びっくりしましたが、開会式の時にそのわけ

がわかつたのです。主催者のラーソン教授、カリフォルニア大学の教授ですが、「皆さん登録料を払って下さい」と言うのです。日本の比較思想学会の登録料(会費)とはだいぶ違うのです。ゼロがいくつ下につきますか。それを払って下さらないと、つまり明後日までこのホテルに何万ドルだかを払わないと、私はジェイル(牢獄)へ入れられる。だからすぐ払って下さい、と言うのです。それで日本人大歓迎といった意味がわかつたのです。この次は日本でやってくれといつております。これは大変なことを言つてきました。私はもうこちらの役員を辞めさせていただいてますから、後は皆様でどうぞ適当にあしらって下さい。お断りになつても一向にかまいませんから。

それから、後にそれに似たような会として、International Society for the Comparative Study of Civilizations、これは国際比較文明学会というものです。その本部はオハイオの Wright State University にございます。それから、国際形而上学協会というのがあります。International Society for Metaphysics、その本部は、ジョージアのアトランタ(Atlanta)の Emory University にございます。それからボストン大学には哲学宗教研究所がありますが、毎年テーマを決めて世界中の有名な学者を招待して講演をさせる。そしてその成果をまとめて出版しています。第一巻は『神話・象徴・実在』、第二巻は『超越と聖(das Heilige)』、第三巻は『意味・真理・神』、第四巻は『倫理の基礎』、第五巻は

『宗教的多元論』、第六巻は『自然』でありまして、昨年度のテーマは、「市民の宗教と政治的神学」であります。来年は「人権(human right)」をテーマにしてやるはずでございます。それからカナダでは、オタワの大学が「the Journal of Comparative Sociology and Religion」という雑誌を出しております。第十一巻にまで及んでおります。

インドはどうかということになりますと、去年、特に私は痛切な経験을いたしました。第一回の国際仏教学術会議が開かれたのです。それはインド政府の主催で、ガンジーさんが演説をいたしました。現在の世の中で仏教の精神を明らかにすることが非常に必要であるということを言われました。ブッダの精神というのは、偏ったものではない。マハーヴィーラ(ジャイナ教の開祖)、ナーナク(シク教の開祖)、それからモハメッド、キリスト、孔子、老子、ソクラテス、こういうような人はいずれも人類の偉大な教師である。こういう人の普遍的な教えに耳を傾けるべきであるということを演説しました。それから十数日たって、あの悲劇が起きたのです。ガンジーさんは決してシク教を弾圧していたのではありません。ナーナクに耳を傾けよと言っているのです。ナーナクというのはシク教の開祖です。だが成立宗教となりますと、そこにいろいろなものがあるといつて宗派心がおこる、過激なことをやる人間も出てくるから、それをガンジー首相は弾圧した。そこでああいう悲劇が起こったわけでございます。

それからインドでは今度、小さな会議がいろいろございまして、あるいは予定されております。一九八六年、来年二月に南インドの Tamil Nadu 州の Kanchipuram にあるタミル大学では、「禅と真言密教」についての国際会議を開きます。禅というのは、Dhyana と書いて斜線を引いて、Ch'an と書いてまた斜線を引いて、ちん Zen と書いて、Dhyana/Ch'an/Zen と表わすのです。つまり、それら全てにゆき渡る。それから真言密教、そして Kanchipuram というところは達磨大師の生れ故郷だという説があります。どうもあまり文献にはないと思いますが、インド人は固く信じております。

香港の中文大学(The Chinese University of Hong Kong)ですが、これはさる三月十日から十六日までにわたって International Conference on Harmony/Strife について会議を開きました。私はついごたごたしてまして行けませんで、論文だけ送りました。つまり、和の精神のことです。これは東アジアにとって重要なことです。ここへ集まったのは、ウィンストン・チャーチン(陳榮捷)だとか、カルバハナだとか、だいたい私の知っているような人々ですが、ドイツからガダマー教授というのがくるはずだったのに、どうも出ていないようです。中華人を含めての比較研究ですが、三つのラインで行われています。一つはどっちつかずの香港ですが、香港ではまたアジア国際会議というのを来年夏に開くとして、こんな立派なところに泊るのだといってホテル

の広告を一緒に送ってよこしました。これと並んで中華人民共和

国ですがね、北京の中国社会科学出版社が『世界宗教資料』というのを出しております。これはいかにも中国風のもので、南亜研究所というのがあります。あそこでは、南アジア、殊にインドの研究をやっています。イスラム仏教の研究などかなりいたしております。『世界宗教資料』というのは一九八四年には第四巻に達した。そして今度は、海を越えて中華民国というから台湾ですが。ここでは国際中国哲学検討会というのを今年の十一月四日～七日までに開くのだそうです。そして、おそらくその線に乗っていると思いますが、ハワイ大学の Chung-ying Cheng 教授が監修者となって『Journal of Chinese Philosophy』というのが出ておりまして、一九八五年には十二巻を刊行しています。第十二巻の第二項は「禪」に関する特集です。前にオランダで出していたのですが、この頃ではホノルルへ移しました。お笑いになると思いますが、私はこのうちのアドバイザーの一人なのです。日本人で唯一の。というのは、向こうにしてみれば誰でもよいから日本人の妙な名前を出しておけばよいということでしょう。シナ哲学も、日本哲学も、インド哲学も、向こうの人は区別を余り考慮しない。とにかく書いてくれというようなことを言ってきたのです。細かに分かれていてそれぞれムラが違うのはわが国独特の現象です。私が日本でうっかり中国哲学の雑誌などに何か書いたら、「こらっ」と言っただけにおぼりのところで掴まってしまうで

しょう。

現象学というと、もっぱら西洋的なものだと思われるが、現象学と東洋哲学、殊にシナ哲学との比較研究を書いた人がおります。『Analecta Husserliana』の十七ですが Anna-Teresa Tymieniecka という名前、ポーランド人か何かではないでしょうか。Phenomenology of Life in a Dialogue between Chinese and Occidental Philosophy というものです。現象学がここまで関連をもって来たということです。それから、空海と関係あることですが、関西外国語大学では R. Mathur さんがいまして、国際会議をしょっちゅう開いて、もう立派な成果も出しております。それからホノルルではかなり日本人の学者が参加しておりますが、仏教英語研究サマーセミナー、これも通知がきております。仏教研究もだんだん広がりました。国際仏教学会というのはアメリカでばかりやっていたのに、今度は、今年の七月八日～十三日に第七回の会議をイタリアのボロニヤでやります。

これは東西の哲学思想の比較ではありませんけれども、Moritz J. Adler という人が、西洋哲学に関する深い反省を述べておる『Ten Philosophical Mistakes』という本を書いています。つまり、近代西洋の哲学には十のミスティクがある。ニューヨークの Macmillan Publisher から出しています。近代哲学は大きな誤りを犯したといつて十の項目に分けて論じております。そのほかチベット仏教の国際会議なども言っただけであります。時間が

ありませんから、ほんの要点だけ申し上げて失礼いたしますが、とにかく従前には考えられなかった、少なくとも第二次世界大戦前には到底考えられなかったような大きなスケールで、今、比較研究の歩みがどんどん進んでいるということをご報告いたしました、私のつとめを終らせていただきます。

どうもご静聴いただきましてありがとうございます。

(なかむら・はじめ、インド哲学・仏教学・比較思想、名誉会長)